

# 台湾北部客家村の死者儀礼

植松明石

はじめに

1. 調査地の概要

2. ヒトであるということ

3. 葬儀（做斎）のかたち

おわりに

## 論文要旨

本稿は、台湾北部客家の村落における死者儀礼を記述し、靈魂（魂魄）と位牌、骨と墓をめぐる問題について考察するものである。

台湾漢族は一般に複葬制をとる。調査地の客家の場合も同様で、従って死の完成には長い年月を要する。

死後、身体を離れた靈魂は、はじめ不安定な状態にあるが、宗教的専門家によって仮位牌や招魂旗に憑依する。仮位牌に対する靈魂の憑依が安定する第一歩は、点主の儀礼であると考えられる。靈魂は更にいくつかの儀礼を経て、3年を経過し、仮位牌の香炉の灰を祖先の香炉に合体したり、本位牌上に名前が記入されることによって、祖先の一人となり陽祖としての靈魂側の死が完成する。

一方、遺体は、死者の住居である棺木内に納められ、一次墓に埋葬されることによって、死者としての運命がはじまる。即ち、腐敗によって、父に由来する骨と母に由来する肉の分離、そして肉の消失、白い乾いた骨への転換である。3年以上たつて、骨化が終了し、掘り出された父系出自のシンボルとしての骨は甕に納められ、やがて第二次墓に祖先として安置されることによって、陰祖としての遺体側からの死が完成する。

このように形成された祖先界の独自の体系についての考察には多くの問題がある。そのひとつは婚入女性死者の位置づけである。墓や位牌上での婚入女性には夫側くみ入れに曖昧性を残しているが、死者儀礼の過程では、身体も靈魂も他系の夫側にくみこまれたかに見えるのである。これらの問題は別稿で追求したい。